

## 論文番号 228

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名(原題/訳)

Delinquency and Mortality: A 50-Year Follow-Up Study of 1,000 Delinquent and Nondelinquent Boys

非行と死亡率：1,000人の非行少年と非行のない少年の50年間の追跡調査

執筆者

John H. Laub, Ph.D., and George E. Vaillant, M.D.

掲載誌(番号又は発行年月日)

Am J Psychiatry 157:1, January 2000

キーワード

非行、死亡率、アルコール性疾患、アルコール多量摂取、セルフケア不足

要旨

(背景) 40歳までについて、非行者は非行者でない者に比して、約2倍の死亡率を示すことは既に確立されていることである。そしてその過死亡は、事故、暴力、そして薬物乱用に大きく因るものである。この研究では、非行者の死亡率の増加が65歳まで続くのかどうか、またそうならばどういった原因なのかを調査した。

(方法) 1949年から始まる the Glueck's study of crime and delinquency から、非行者、非行者でない者を抽出した。475人の非行者と、対象として456人の非行者でない者を、14歳から65歳まで死亡追跡した。各対象について、少年時、青年時(25歳)、成人時(32歳)の多面情報(家族生活、教育、職歴、軍隊経験、余暇活動、犯罪歴)を収集した。

(結果) 475人の非行者と456人の非行者でない者の内、65歳までに、非行者201名、非行者でない者123名が死亡した。その内32名の非行者が40歳未満で死亡したが、非行者でない者ではたった18名だった。163名の非行者が40歳以上65歳未満で死亡したが、非行者でない者は105名しか死亡しなかった。 $(\chi^2=13.92, p<0.001)$  非行者の平均死亡年齢は、49.2歳(SD=13.0)であったが、非行者でないものの平均死亡年齢は51.6歳(SD=11.6)であった。死因を自然死(心臓疾患、癌、その他)と不自然な死に分け、不自然な死を、暴力的な原因(事故、自殺、殺人)と、セルフケア不足に起因するもの(肝硬変、アルコール性疾患、感染症)に分類した。

セルフケア不足による死因(事故、自殺、アルコール性疾患、感染症)が非行者において53名であったのに対し、非行者でない者では、28名であった。殺人による死亡が、非行者では9名であったのに対し、非行者でない者ではいなかった。感染症による死亡も、各々13名、0名であった。また、本人及び両親、教師からのレポートに基づく独自のスコアを作成したところ、17点から26点の群(強い非行の群)では、1点の群(非行でない群)に比して、2倍以上の死亡率を示した。一元的解析によって、非行、幼少時のしつけ不全、教育、アルコール多量摂取、成人後の犯罪は、各々65歳までの死亡と有意な関連があった。ロジスティック回帰分析により、非行とアルコール多量摂取はそれぞれ独立して65歳までの死亡と不自然な死亡への寄与を示したが、それらが調整されると、教育や、幼少期のしつけ不全、成人後の犯罪は、死亡率にそれ以上寄与しなかった。

(結論) 非行は、早期の死亡率に強く関連があるが、その病因論的な関連は未だ不明である。非行、幼少時のしつけ不全、教育、アルコール多量摂取、成人後の犯罪はそれぞれ早期死亡と関連があるが、その関連はそれほど強くない。多変量解析では、もっとも強い予知因子は、非行とアルコールの多量摂取であった。非行者の死因は、非行者でない者に比して殺人とセルフケア不足に因る死亡が特に多かった。